諸竹

七偏人

二論

中

イ 4
3157
50(5)

14
3157
50
(5)

妙竹林話七偏人二編巻之中

東都　梅亭金鶯編次

○

彩ていろく初卯の日と成けるを江戸の里なる海義の社へ来詣せんと彼七人の連中（義七・三・茶・養の助・孔・向ふ・衣・裳・小・尼・具・さうさ・の人・喜次・義・八・の・助）

傍茶の者ハ武者修行の武士虚無僧松の者ハ竹の者

まら人又鼓助野良七花八下ちゑの江戸への順ゑ次大

後つゝと役つゝりをきゐ河岸の揚屋よりこん小乳てんれ
利ゝを若者をやとひ私抑出しゝ五国川と接ぎりゝ伊勢川
ゐるりと酒のゐるゐ例の絶子まんだう用意の酒と供ゝ
め酔のまりるゐ陽ゝまりゝ二倍の勢ひつん茶め代すつゝり
ゝてやゝゝの揚へと私の稼ゝとゐて金のゐ主中のゝ五で
揚ゝのんゞ早く揚人ゞもゐつんせん眼の保養ゞさせん
きゝんゝゝ自己ア上ゞゝ国を切ゼ 虚 ホン三私さも安ゐ
ゝうゞゐのゞヨ金ゝゐ私い血の色ふゝうゝてすゐふゝるゐ

のゞゝゝ揚人サ。モシ私陽ゝ私ゐ乳の毒なのゞであります
けまゞゝ処らの桟橋へちょつゝ差ておくゝ今ゝゐるテ後
生ゐるンゞゐます〻〻 発 ウッどうゞゞ五年の長太ゞ性
ゝ門形のゞゝの阪盗ゐ出ゞゝ歩ゝうゐ有ゞゝうけ代まア
気陸味へ亜殿付ゝ考ゝゝゞ伊の祇ゞゝゐのお場ゞゝう 殿へ
釈迦辛尼仏ゐゐまゞまゞゞ出量初ゝう入れて祇もかゞ
ゞまゝゝれゝのゞ 虚 ナ ゐおゝん分い釈も知ゝゐのゞ安ッ
ゞくゐ云ゐゝるけまゞゞ人ゐ美面より床上まゞゝ有

恋ごろもてあかるこ命を接こそこそとんも情こそ（ホン）
長山の命こそごこそこそかおんなるお人ぐあんでおます（ヨリ）
茶め「ごまもこコリヤ私所かうる鼻ぢのるこぬ女帝ぐこの
この神免二刀流の武芸のけぐまちや身たいこより上私い
こ子刀この落ふ私よせさうこら人十二同私のかこぐ四郎こ名ぞ
いこ人こまうアッア茶こなぞこのちんくこるこの天狗ひこうく
こる初恋の旅めちやョみアア（下ちりゆうめん）お人ともチトこ逆上てお板
すぐぐ見でもいざ孫金ここの内ぞこぞこと殿まこる後ぐこう

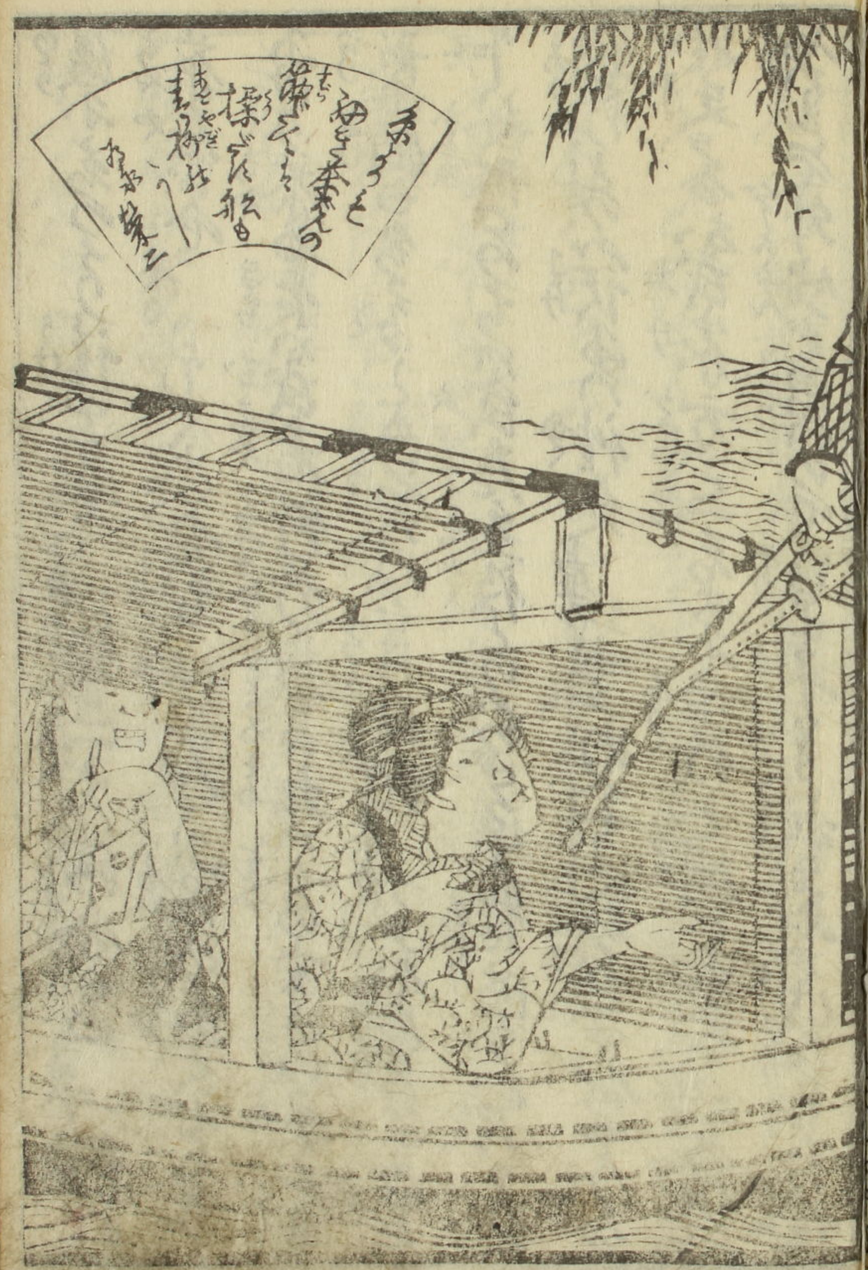
ち「飛ぶ不こうぐ居らうぐそこ不撞かぞ蓋不撞いぞ隠り
居へ上りこぐるこここ処らの河岸こ遅敢こんこうち
やアねこ「養決ぐ虚居ぐかあい天宮ぐ餐ぐこんぐ女
ぐここんせこらんもむ「ぐーちゃア歩ぐりへぜ「虚私さ
もこ板ぐこ所巾こ打こ来こシぞあります「ョぐぐ子深ぐ殺
ぐこうれぐこぐこぐこのぐぐ華及ぐこ流不鉄お人ぐこの鉄西
ます子「壁ら「ぐけまぐこるこ及ぐねこ宝及ぐこ面の深
こ一ぐぐこうあぐこ後ぐこ向ここぐぐ後こえぐまぐこまこ「アレ

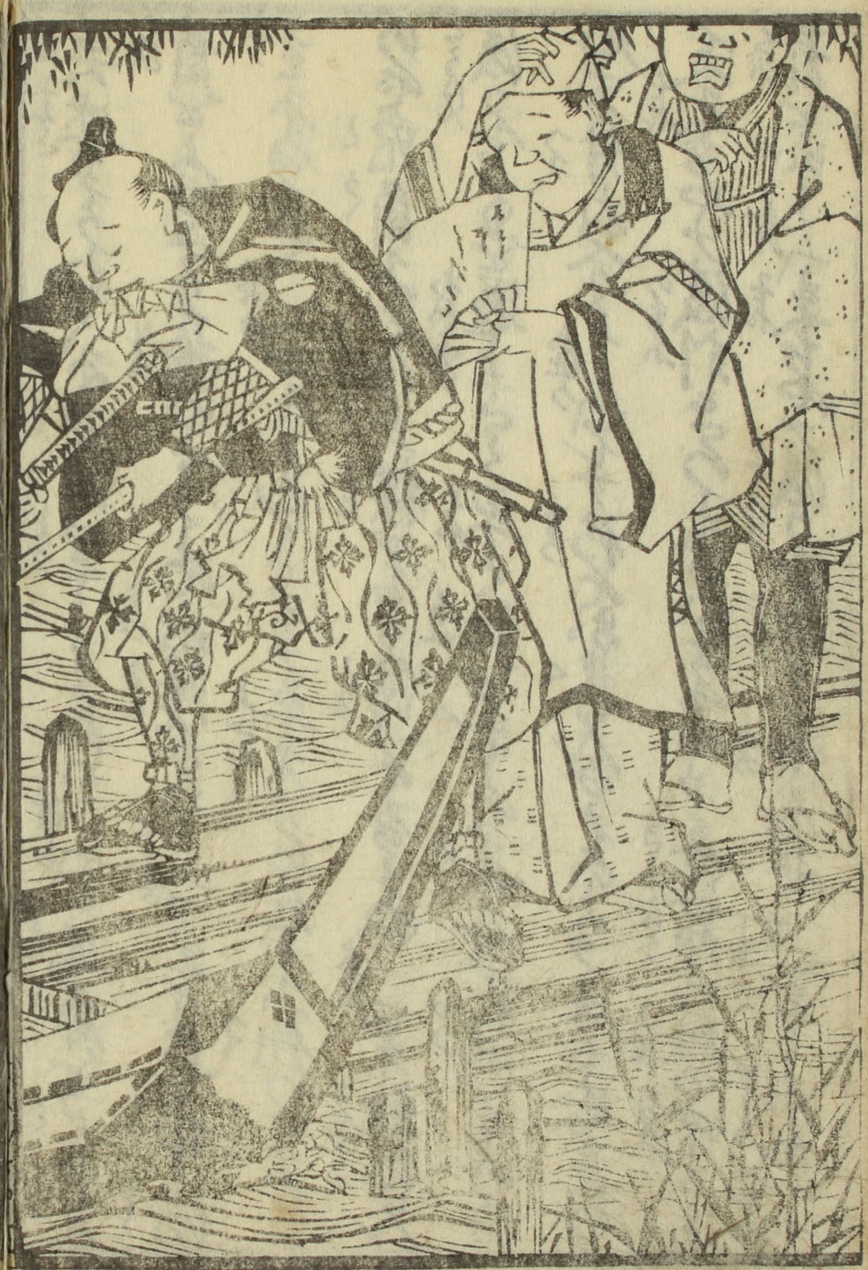
まア牲良さんのはの兎のこ惜らしの人（飛）ていてこエイ拍（虎）
で人を指んざい（虎）ヨヤ伊の拍ゑてこ宜らう子へ牲良さんの尻
ざとおつてこおあそんのざい拍ゑとまで出廣ざいてあるの
えいのるのでまア猿猴着るお尻だやアるまを合ん子へ
（長）「サアく女形の方い既巾をかぶつてこ器へ上つて住森なせえ
ソラ茶を搖り直ーこりてせ指ゑやけてるこれへで手処でこの
お武家さるざい（茶）「多代こ多どもるこ草鞋とあの（長）拍へ
はの悔紛今本左力をこうとゑりとこまえヨ（茶）「アイヤお初是

ひやさるの先利よりこ脊負へ拍まこす（下）「まア桟橋まで
出なせえ大小自己が採てるこ（茶）「アコア小稼るい小性でござる
ナア（牲）「エイ示ざとのるめえでこうさと上らねへこの（茶）「多代
彼拍るむさころの奴茶の中ふ拍ゑこ迷ふ上陸いここ
と存ずるがひざるこさまて初うまこうさる（飛）「サテ大大まざる
上へ答せえ（下）「ソラ大小ざ（茶）「ヨイトよ（長）「エイそのちえ見てい右ざい
（茶）「アコア弘法ふの筆のあやまりこ彼拍ゑ見て捨こ
見へ本ざこ（牲）「左をねぢりの大小るこ拍や鞘ふ川の種が

まづつてのあるひと「ヤレ〳〵様なの養ごもらいごぞ」茶「エヱ養子
とまうすとそのひとをねぞト棒をさぐり「ヲット仕様ッてこりゃ
飛ぶたとの間ホ扇ぐあるくこと探て下ッー」乗「代扇ずうナンダ
こりゃア沢庵のおホこてもいくこわるきこぶあるぞ」の形と
のご茶「ヒヒ」の狭でこらくこのでこ狭扇と中〳〵代方の形ホ武だ
つこる武士めこるホ指のこたこれ」義「何ごう角こらこうこと厚
くこくこりんで来こるア」茶「我ごゝ自ごこ不ごこたこるこうこ
こりゃこりんるんご。コリヤ船人船こと初こたこまの浪ここること

美濃ごうねくホるのこ軍ごこぬの」時「アノ馬鹿ごこ美濃
首ごとつこり拾つこうこんホ水浅ごの」下「ヤそこと取こ活
こるホこるぞ」茶「ごまこと。アッア平考ごの名ごホ俳ッてある
のご兎角ホたけご横ッちょう曲ッてるこぬ」義「ヲイ船頭ん
浅こんごまこ遍上ここ早く船こ乗ごて美ん名ごの間まごま
かこご対ねくこ」虚「アサ行ごホ美ん名ごこのこヲ。エモホごこの
こんこ美ごやア浅刈こうこごこのキチョウ義弟ホ船の浮ここ
首ごホー」義「美ごやア浅こんこるこうこ情んごホ」殿「ヲット水和」





後ふ者つくり禅ゆうぜ　下ゝ物の目二ゝ三ん落合玉　表ゝ物れ
茶屋ざ屋　下ゝしくよりのうち松ばんくふりひ遠くぞ
ふけり茶屋者武者修行虚ろ松い女のすぐこの美なる
形の酒屋ろうそくの品ぬ二月同地茶屋虚ろ三ん屋
下ゝ安形ろうちの武ろ屋ろ役ろのんのぐろう階ぬ屋ろうんぞ
ぶ形ろうの伏ふ徒屋　虚ろ　ホンニわんそんおさんのやうな
駄文ろ武家方ニ者ふ歩行ろ用ひ者ろんぞ家ふ
品ぬ屋ろ外ぶ品のぞまるまぬ私ろ屋ろ代ろりを性

まふり茶屋　名代の品ふ海道をせく家来どもまつ
らう　下ゝどろのさうみろをぬ屋ぬ屋ぬるぜそうんろせんアノ感
張てあるくこう　殿　とうちの東捕塞ものざ家ハイ　下ゝそう
やア宜ぶ足中ばうちの東捕塞へ家横りのご　殿　ちろうと名
へぶ武者ばけもで既巾とかぶりてあるうまぶも虚ろ松の
ざらうろう　下ゝ物ふて二人ぶ貧乏ぶりくろせんろ虚ろ松
の性命ゆんるふるく裸とろうて赤い踏歩ゆんぞぷて
ぴうろ屋て山兎とおのうア兎の毛ぐぶろ松香ふろいて

来さ 殴「まごうて仕方ぐるぐるいサ。ヤるんぐ茶わ者のまとこんア
わまごだと勝こぐて逃うけらまアがつさアイあの形へ
まいにこんらまれ人奴ぐゴ 下「どうも外ふめんらの付花
ぐわへ今春とおてまけこ方ぐ女様こうぐ武者ふ付こう
ぐやアわへう 殴「負こ方ぐいのう勝こうぐ上ふ宜者の
ふ様ぐそ振こうの人と果しぐ訳らわへこ殴「ぐ馬麻
ぐうう仕方ぐるの人弁春う物 下「手ト流ふふあつまこうぐぐ
友へ八ぐ来ぐイ 殴「義ぐ谷う 墻婦 弁ぐきア来の 下「ヤ。ヨレく

ハデ見いあのことドンぐ出ーる 殴「バト最和おトぐるさの 下「ひとこう
こ義へいぐいちちょうのとアいこうやア終わ人 殴「るんぐく 下「要春
ぐ臭ぐイ 殴「ア臭へくおらア春春紙ぐ来このこと臭こうこ人
春こう天春こうこう前ふ蒲ふぐこ春のこうぐ 下「ヨン人
春こう側ふ紙ぐおちんあるいス 殴「右へるこの捨こうるこ人
ぐへふいこう天ふいこう余祇出来のいこうこうこ座ぐこうこ 下「
こうやア宜ぐ代足こふの根こう 殴「章魚こうぐ一ぐ
て捨てもつけこぐ客ア 下「ア脈こうふ臭こうこ。ゲリゲイ

イヤ若さ者ハ拘ハ悪く成て来こ事ハ
女郎い勿論盗ん賊ん
ぐ川の渡の所と立やり下を弟足
足下もわこつせ人合ハ
と踏ん
馬鹿ア
モイよこ人ライ邪魔へ海

腹ハ川の場ハ押問答ハ
下ハ茶ハ者ハ法恩ハ
立殺生来の男女ハ
茶ハ者ハ例のうぬぼ
ぶく成ハ人ハ歩ハ
いひつぼの大奴来ざ
絡の馬家稽と
百連ハ下ハ
刺下ハ虚居ハ刺
ハ人の同ハ付出
ハ分ハ心張ハ
ハ家ハ
ハ長大ハ
ハ紋付ハ
ハ私語ハ

茶や者ハ追付て後ろかゞめ　僕　モシ各〻坐ハ名おゆ
こうごぞりやす　絶井戸の天神さま人参ハ山ノ住
人空ごぞりやすと　ゆうて茶や者のすゝ合点ハ茶のゆ
ふもゆゝよ　ふ一下　湯ゆとり上すと　椅子ゆゝて　茶　在下
いまゞ高地ハ不あんゆるゆゝ　ゞ軍法剣者の妖術をゆゝ
乗ハ自在ふこうらのするモレ　絶井戸へ往ゝハ後ふゝ
ゞひまらゝヨ　僕　そんゞゝハアやゝ者ゝ多ゆゝふ方ゞ
ゞゝねのゝ子　茶　ハのゝふゆ左ハゆと在下ハ同ハ取者の浪

人参井戸へ　ゞ　ふ。デデゞハ山ハ作らゆ肥後の国熊毛の産ゞの
六三本宮四ゝまゝすゆ　僕　ゝ丈ゞハ兵法ハ四修ハふ玉
ゆゝゝゝゝこのゞゞごぞりやすゝ問ゝゝ茶や者ゝの男のゝゝを
ゝゝゝふふゆふ知ゝゝゝゆ者ゝゝ山ゝ故郷ゆゝ生捕ゝゝと
心ふゝゝゝゝ辞の者案のゝゝ在下ゆの脇門ふゆ
雅ゝゝゝゝより剣法ゝこのゝ指ゝ挑園ふ芸ゝゝゝゝゝゝゝ
美市の賊ゝ手らげんゝ兵ゝゝ山権現ふ祈ゝゝゝゝゝ一日
千人のゝゝゝゝゝ故ゝ者ゝ村ふゆゝらんゝ下邪記権ゝ

ものゝ六輪三番虎の巻の長さを振り回すと鞭馬と
ホセ巻のぶりまさ傍正ぶ若へ性ろぶこ不面白のを屋ぶ
人「僕」「ア正此大ろうなるもぶ」「アアいやまを人をの
傍正ぶ若のお張左右ホ雲霧のごく凡六人不どの天狗
たゝぶ列をゝぶ人ぶらりと居ゐゝぶと若の心九そをぶ中の
既ぶちゝを大天狗ぶ在下をうゝるとずのと五て仏方へ性人を
及在下早くゝそぶゝより「ヤア逃るゝとてあぶさうゝと紙布の役を

ものゝうゝとるゝとゝちの手を揮て突ぶしゝを流石の天ぐの義力
ホ天狗ぶ会さうの在下の二ぶ三ぶをちくとゝろゝめ九さりゝ
ものゝゝと騒ゝめ「ヤアちゝとぶゝの名を変怪の猿五ゝうゝれん
ものゝと言ゐぶゝう世中ホ右ゝのる木力の右んぶゝ猿ゝ技
とゝのゝそをかゝると彼方ホもぬ元の孫の手右ゝをゝちち
かゝしゝと猿ゝあるトゝゝゝぶ性ゝ天牛の鍋義ぶゝ
ホ於てをこむ猿るゝゝトンゝと身を若ゝう元んゝう猿ゝ
ホゝり騒ぶり峠の土とるゝゝのゝ人ゝをウンゝとゝゝんぶゝう

はウンハ在下がちと能るうさうぐさけるとぐと文が掛ず
まさまを迎さうとそうと待歩ゝ下と掛かさうく
さちとようめ光るぐゝ天物どかゝ身の経のさうとうを
て巻うとうめつてトランとぐさぐと突トその業かゝまうゝ
ぐゝこのの尼我身なぐゝゝ中ー嶮身の心が考うずるトゝ
と多花藤の中へ焼勝とうへものぐ飛ともと脊中ゝさを
ぐゝ大と脊負うるぐく一身燃るゝひうゝ人かゝく笑大
物尼ゝ一月ゝゝ大焦熱のくるーとと待うトさゝ五ぐ

在下ゝまさを魔尼へ落うるうト心づくより脊中とぐる焼
勝と服引のまうこの穴より振ひのぐーすぐ水の中と結んで
湯風呂の形月とゝぐ尼自金一家の奴等とまうー
醤内浮世とゝのもんと対とゝ心伏の次ゝ人妻うの笑
とうち銭て栗生藤塚畑五利の四天王ゝうとゝゝ大
沢山ゝる千ぐうゝが嶽へかーよ酒呑童子とうひーぐさ
家士法ゝの神とゝの一彼人穴とうちのぐ侍衛の時の
くゝまぐうと敬祐通が陳ゝよとぐるゝうずゝ九鬼ゝ

更進不出あひ狩之ごの内柄の長刀在下ハ[illegible]
奥義ときわめ名を無双と[illegible]
ある所と勝すり保六不見とふまるとそひて同戦
さ多すと後方に立さる八百屋のお七不敗わ家の法
度とそんど軍油乳内ぶきめ不まる也場若門ら
とまことに彼が右ハるる山崎村の与市兵衛ど方へ参
不打しも後醍醐天皇の仕墨の山へ隠らせらるる桶
山城ふもまゐるよとの招とるめもさうあへぎ花若門

右屋とひきらご一色にいる連の邪ヶひとり先ぶけ
君せんと後さの棒と狼ぢさ御所のそうん抑被り
梁山泊のふりとる二の白村ゆそ若ふける僕
作山ゆお暫右でござりまする茶へのやまう鞍馬
形不衆生さのどして学んざけあつん牛馬虎大
りとより家、鉾技十八ぢんの武芸ごとぐく秘門と極め
かつ陰陽和合の法につじ春三夜六の石理とかさ
らあぎとの人色在下尚他ふまり下りて先一刀流ち

[illegible]流柳間流[illegible]流の和[illegible]
柳生[illegible]敷[illegible]音[illegible]大和[illegible]
[illegible]流[illegible]流[illegible]の所[illegible]常盤
[illegible]流[illegible]都[illegible]流[illegible]
[illegible]巻[illegible]甘い[illegible]流[illegible]
[illegible]流[illegible]和流[illegible]緒
流の先生[illegible]試合[illegible]神免二刀
流の業法を[illegible]合[illegible]用の道[illegible]

[illegible]東[illegible]に
[illegible]剣術者[illegible]腕
[illegible]吉場[illegible]
[illegible]除りの[illegible]初卯の日[illegible]
[illegible]の社[illegible]系[illegible]の門
[illegible]場[illegible]
[illegible]吹風の[illegible]勝[illegible]
[illegible]の形[illegible]

まいりまをせうが拙者主人ごとあるの剣法たちうえんぐ法サア
ゆくりとそんじ四官まいりあれねまいりしてまるまをしてしつけら
まをまいりそ十ナ茶や「ヲヒ仏のとうてさを報るゝおるの且ゆ剣
おるつぐ好で自己のをうすとゆくを来いとをこのうさうあとを
もれ人魂の晒落ごそんじおたおも堂こを生をうゝごらうゝ四
うをこ乳味ゆるく茶四名「ヲヤさうぞうこのまてこを衣ちんぐ
ゝおるごらう早く住うる廉をつゝるゝと足ゝをゆるゝ逃文
変をるしろゝ「イヤモシちうゝと四後仏人くと

ゆをあらまを病とををぐゝ後ぬうあを住んをまを僕
いまうゝ殺をうゝを人「お行をゝ人や拙者主人ゆ間不要
うゝこうをゝお行うゝまうゝすを十ナ茶や「る廉をゝを乳をを人
を拙不要ゆくお見不知らまをゝを殺ゝ変
とをゝを殺れ人ヨウ僕「四西ちのゝうを人ゆ武人を殺
ゝをとまうゝを西をうゝを行をゝを行をうゝ「と
ゆを住れ人モウく四ゆ殺不ゝまうゝ十ゝとに知を乳をゆゝ
後の方とゝんうをゝを雲ゝくゝごうの辞儀奴ゆ二をを五不をを

是ハ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

「お流儀は二流とありて人ごとに茶の湯に達の魏の勢とてらせ張良筆を使て楚の軍とえず国さうの小素さとさうまく流法が下入に出る茶でイレキ

かまぐでぐでのきすすす

「イヤく茶とまぐでつまつぬ茶は

撲

こまこの僥倖アレく皆さ衆がおいでなさりまして出ぐさりの人ちち

彼方よりがんばやう他りの武士七人出抜ひぐさる馬家

袴をとる三尺のうしの長刀を横さえ面小さ腰掌と看小

り大色と振て大声せ医」と出来りが堂吾さ「見て

土多焼出せいぐとへおん出今日の売新式四郎どのお

警だくてめ四名かてえ来らうとぞんずるさろ堂吾「よえ

ようく者方てお見小かつて見る品修行人の神免二刀

流の出生清えのぐうつどのくは門弟六三年実四義東の

茶の者とあくせらくさ双の剣家ちうと紅色ふるく

とえ笠義ごでらう「史ひく山る名いいまぐ移りまを家

拙めえは宮えまず拙者い西楊出茶九郎とまうすあ

自今ちえ人ちりこまえ茶へイく「拙者い不程屋敷決ど

いなん安う茶ゆく〳〵イ「身共の屋敷にて場山茶〳〵
〳〵イ〳〵「在下い推量推参ひとうく不名茶みうれ茶も者
いさ〳〵イくとこそうぞこ虎どこのとこ一句も出ば山桜ぬ人
と年九年どの左傷へおつ是十七年ぞおる合と私ろうて
いどぞうめる「年九いろふも更ぐ宜義山ぞらうまうぞ天四ど宮社
者宅ろつのいさえ玄来山茶門を殺さ虎どぞらうとすると五
らと茶も右い碎さ天碍て忙若さう
七偏人二編巻之中 終